

第11回練馬区医学会

主催：練馬区医師会

後援：練馬区

硬膜外ブロックによる脊柱管狭窄症患者の治療経験

医療法人社団遼山合関町病院

ペインクリニック科：河手 真理子

整形外科：丸山 公、風間 貴文、新太郎

関町病院整形外科に通院中の腰下腹痛の患者のうち、理学療法を含めた一般的な整形外科的治療で改善が得られなかった患者を対象に神経ブロックで治療し、その効果についてレトロスペクティブに検討したので報告する。

【方法】

対象は10人。53才～81才（平均 68.8 ± 7.7 才）、M:F=2:8であった。診断名は変形性脊椎症、腰椎すべり症、椎間板変性症による脊柱管狭窄症である。症状は腰痛、坐骨神経痛、下肢の知覚異常、間歇跛行などであった。治療は腰部または仙骨硬膜外ブロックで行った。0.125%Bupivacainを使用し、週1回のブロックを施行した。平均約4ヶ月の治療を行った後に、治療効果を判定した。判定は、Roland-Questionnaire (RDQ:腰痛のための動作制限) 日本語版の項目数とNumerical Rating Score (NRS:治療前の症状の強さを10として、患者に治療後の症状の強さを数字で表現してもらう痛みの評価法)を使用した。

【結果】

治療によって、RDQ項目数は平均12.9から8.4に、NRSは10から平均2.2 (range1-4) になった。

【考察】

治療後も腰痛のために約8種類の動作制限があられたが、治療後では、症状の強さ、頻度、持続時間が減少していた。また、NRS2.2という値から全体的な自覚症状が軽快したことがわかった。

【結語】

脊柱管狭窄症の患者に硬膜外ブロックで治療を行い、症状を改善することができた。さらに、外来で2～6週毎に硬膜外ブロックを継続することによって、症状を良好にコントロールすることができる。硬膜外ブロックは脊柱管狭窄症患者のQOLを上げる有用な治療法であると思われた。